

新著紹介

○地理教材研究第九輯 大正十五年十二月廿日地理教

材研究会、東京日書書店發行、定價二圓三十錢
教材研究の第九輯が出た、いつもながら地方篤學の人々の眞面目な研究が満載されてゐる、本書收むる所都合十八篇、二九四頁。北九州諸都市の地理學的考察をはじめ、高松、酒田新潟、岸和田、宇品等の港市の考察が多く、地形學的考察が僅かに二篇で、人口分布に關するものが二篇、自然と人文との關係を論じたものが三篇ある、いづれも熱心にして精細なグラフや地圖が入つてゐるが、研究の方法否、發表の形式が何れも大同小異であつて、地理教材研究タイプとでも云ふべきものが出來かけてきた、これは果して慶すべきことであらうか。蓋し教材の研究なるものは、平易にして見やすき事實を態々圖表にするだけで能事終れりとするものでなからうと思ふ。予は西川君が更に大英斷を奮つて鑑別さるゝ程度を高めて頂きたいと考へる。(藤田)

雜報

○滿洲にある朝鮮人の數 滿洲に於ける朝鮮人の九〇

％は農民にして、其餘の自由業務及無職者として、全滿洲に

分布せる數は想像外の大多數にして二重國籍を有するもの全數の三分二以上に達す。其外は普通朝鮮農民として南北滿各地に散在するなり。

吉林省延吉道を中心として、北は牡丹江沿岸に沿ひ南は朝鮮豆滿江岸に沿ふて最大數の住民農民が、其地域内に散在して農を主要生業とし次は東支鐵道阿城方面より綏芬河に至る間の住民は、鐵山労働者鐵道職工として従事するもの多數なり奉天省方面に至りては東邊道を中心として一概に日本政治區域を離れ奥地に入り込み水稻高粱耕作を行ふ。

斯して滿鐵沿線に沿ひては少數の日本資本下の小作人にして交通便利を離れて行くに従ひ比較的鐵道沿線農民より生活程度高くして生活安定をなしたるもの相當にあり。又北滿洲にて鐵山方面に従事するものは農業者數に及ばざるなり。

朝鮮人分布數を擧ぐれば左の如し

一、南滿洲管内(日本治下)關東州 九七三

滿鐵屬地 八、九三三

領事館區 三〇、四八七

小計 四〇、四〇三

三、八八一

二、北滿洲領事館區内

支那側行政區域及前述の奥地に住する二重國籍及朝鮮農民の數

(支那側及日本側調査數)

一奉天省區内 二二二、四八二